

Y6-4

病棟患者に対する口腔ケアの質の向上を目指して ～各症例に対する専門的支援～

横浜市立みなと赤十字病院 歯科口腔外科¹⁾、
横浜市立みなと赤十字病院 リハビリテーション科²⁾、
横浜市立みなと赤十字病院 看護部³⁾
○田頭 絹代¹⁾、向山 仁¹⁾、櫻井 仁亨¹⁾、
川本 真規子¹⁾、小野寺 敬子¹⁾、中村 浩²⁾、
佐藤 優子²⁾、渡邊 美有紀²⁾、矢尾 ゆう子³⁾、
大坪 千智³⁾、小森 悦子³⁾、瀬戸 弘美³⁾、
下山 理子³⁾

当院では口腔ケアサポートチームにより病棟における看護師の口腔ケア業務の支援を行ってきた。この活動で、病棟患者に対して二つのアプローチが必要であることがわかってきた。ひとつは口腔ケア自立患者に対するもの、もう一方は口腔ケア介助患者に対するものである。自立患者は通常口腔ケアの対象となっていないが、病状の変化に伴い歯科治療や専門的口腔ケアが必要な症例となってくる。口腔衛生に関し啓発し、口腔清掃を自立して実施してもらう目的で、ベッドサイド端末に自立口腔ケアに関する資料を入れ、適時閲覧可能にしている。口腔ケア介助症例については、歯科依頼や回診時に専門的介入が必要と診断された症例に専門的口腔ケアを実践している。専門的口腔ケアを看護ケアの頻度（一日三回）で実践することは困難である。そこで、専門的口腔ケアと看護師口腔ケアの差を埋めて行くことが大切である。そのためには看護師の口腔ケア技術向上と種々の状況に対する対応力の向上が必要であると考え。基本技術向上のためには院内電子カルテシステムやベッドサイド端末に統一的標準的口腔ケア手技を図入りで紹介している。さらに標準的な手技では対応できない症例に対しては、症状に応じて口腔ケアプランを歯科衛生士が主体となって立案して看護師に提示するとともに、専門的介入時に看護師に同席してもらうことにより、実践面を含めて理解してもらうようにしている。今回はこの二つのアプローチの実際について報告する。

Y6-5

周術期口腔ケア活動の現状と今後の課題

原町赤十字病院 NST

○渡邊 智子^{わたなべ ともこ}、高平 裕美、宮崎 厚子、
荻原 才子、中里 健二、内田 信之

【目的】当院では、平成19年にNST内に周術期チームを発足後、“周術期の口腔ケア用紙”を作成し、歯科衛生士による回診を行っている。回診が定着した一方で、患者の口腔内の問題点、問題点に対するケア充実の必要性が明らかになってきた。周術期の患者の抱える口腔内の問題、口腔ケア活動の現状および今後の課題について検討した。

【方法】平成20年4月1日以降に口腔ケア回診を行った手術施行予定（必要時術後）患者の口腔内アセスメント、口腔内の問題点をレトロスペクティブに見直した。

【結果】平成20年4月から平成21年5月までに口腔ケア回診を行った患者38例。平均年齢74.8歳。口腔ケアが自立している患者は69%であり、このうち54%は口腔内の衛生状態が不十分であった。禁食中の患者は11%であり、このうち75%に口腔内乾燥、50%に舌苔がみられた。口腔内の問題点では義歯・歯間・歯頸部の汚れ17例、義歯が合わない5例、口腔・口唇の乾燥5例であった。

【考察および結論】禁食中の患者には口腔ケアが不十分になる傾向があり、さらに唾液の分泌が低下するため、口腔内の問題が起こりやすくなると考えられた。口腔ケア自立の患者においても口腔衛生状態が保たれない要因としては口腔ケアに対する患者自身の不十分な知識も考えられた。また、義歯・歯間などの汚れのある患者が多いことなどから、個々の患者の抱える問題点を把握し、必要時声かけ・見守りが必要であることが示唆された。私達はこの現状を十分に自覚する必要があり、NST委員を中心に病棟スタッフのケアに対する知識・アセスメント能力を高め、全ての患者に対してアセスメント・ケアができるよう検討していく。